

# 小・中・高校生における自己概念の発達

## — 自尊感情育成におけるジェンダー視点からの考察を含めて —

荻野佳代子

### 1. はじめに

中央教育審議会（2006）は、学校教育における今後の教育内容の改善の方向性の一つとして、子どもの「社会的自立の促進」を挙げている。そしてその基礎となる「豊かな心」を育むために、個性や能力を伸ばし、主体性・自律性を育成することの重要性を指摘している。この背景には、子どもの意識調査において、諸外国と比べて日本の子どもたちは自己評価が低いこと、一方で規範意識の低下やいわゆるキレる子どもなど自己統制面での課題が指摘されてきたことなどが挙げられる。こうした実情を踏まえうなで、「自他の生命を尊重し、学習や生活などに前向きに取り組む力を育てることを重視し、その前提となる健全な自尊感情や人間関係を築く力などを高めることが求められる」としている。

さらに平成20年に示された「中学校学習指導要領解説道徳編」（文部科学省，2008）でも自尊感情への言及がなされ、「基本的な生活習慣や人間としてしてはならないことなど社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識，自他の生命の尊重，自分への信頼感や自信などの自尊感情や他者への思いやりなどの道徳性を養う」としている。こうした流れに沿って、学校教育では子どもの自尊感情の育成に向けて、一方では教科を通底する一つの視点として検討がなされ、他方では道徳をはじめとした各教科での具体的な取組が行われてきた（安東，2007，

佐久間，2011ほか）。

もともと自尊感情を含めた自己概念およびその発達は心理学において重要なテーマの一つとして多くの研究が行われてきた。そして、子どもたちの自己概念の特徴として、年齢・学年が上がるにつれて自己を否定的にとらえる傾向が強まることと同時に、女子にその傾向が強いことなどが指摘されてきた（加藤・高木，1980，山本・松井・山成，1982など）。高橋（2009）は、子どもたちが親や教師から、性別によって異なった役割や行動を期待されており、そうした期待が子どもの自己概念の発達に影響している。それであるならば、学校教育における自尊感情の育成において、ジェンダーの視点を加えることがより有効であると考えられる。

よって本論ではまず、自己概念なかでも自尊感情をとりあげその発達について概観し、さらに自尊感情育成に向けた学校の取り組みについて整理する。その上で自尊感情育成にあたり、ジェンダー視点を加えることの有用性について論じることを目的とする。

### 2. 自己概念と自尊感情

自己概念（self-concept）とは、対象（客体）としての自己、および自己の行動に関する知覚やそれに対する態度・感情・評価などを意味している。そして、自己観察だけでなく周囲の人々との相互作用により形成・発達していくものである（松田・松山，1988）。自己概念が包

括的、記述的概念であるのに対して自尊感情 (self-esteem) は自己概念の評価的側面かつ感情的側面を表しており、自己概念の一部と考えられる。

近藤 (2010) によれば、自尊感情の研究は William James が「自尊感情」=「成功経験」÷「願望 (自分にとって価値を置く領域での要求水準)」と表現し、個人の願望との関係で自尊感情が形成されるものであることを示したことに端を発している。

その後 Rosenberg (1965) は自尊感情尺度を開発し、自尊感情が実証研究で用いられる概念となる基礎を作った。なお日本では山本・松井・山成 (1982) が開発した邦訳版がよく知られている。Rosenberg (1965) は自尊感情を「自己イメージの中核的な概念で、一つの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的な態度である」とした。さらに自分自身に対する評価の感情として「非常に良い (very good)」と「このままでよい (good enough)」の二つがあるが、自尊感情には「good enough」と感じる事が大切だとしている。この「very good」の感覚をもつには他者との比較が重要であるが、一方「good enough」という感覚は自分で自分を受け入れる感情である。すなわち、自尊感情にはより直接的に他者との比較による部分と、内在化された自己評価の部分双方が含まれているのである。

なお、自己概念に関連する用語には自尊感情のほか自尊心、自己肯定感など類似の概念が多くある。とりわけ自己肯定感是人権教育をはじめ教育分野でも多く使用されている。これらの概念は self-esteem の略語として同列に使用される場合が多いが、主に臨床心理学の立場からは、自尊感情が認知レベルの認識であるのに対し、自己肯定感は自己を存在レベルで肯定する、より実存的な概念との主張もある。すなわち自尊感情が実証研究で用いられ肯定・否定双方の意味を含む概念なのに対し、自己肯定感是自己受容に伴う肯定的感覚であり、実証にはそ

ぐわないというのである (諸富, 2011)。

一方 Rosenberg が示したとおり自尊感情を自己と他者の二側面からとらえる見方は学習指導要領が示すところでもあり、ここには「育成」するものとしての視点が含まれたものといえよう。ただし、自尊感情を育成し自尊感情が高くなるほど望ましいこととは単純にはいえない。近藤 (2010) は、とりわけ教育分野において自尊感情に対する関心が高まってきた昨今の状況に対し、“self-esteem 運動”ともいうべき少し前のアメリカの状況と類似していることを指摘している。すなわち、自尊感情を高めることにより学業成績を向上させることが強調されてきたが、現在はその効果に懐疑的な動きが出ているというのである。また高すぎる自尊感情はリーダーシップをとるうえでなど負の側面も指摘されている。こうした点を考慮しつつも自尊感情の高い子どもとは、情緒が安定し、責任感がある、成績が良い、他の子どもたちや先生とのトラブルが少ない、社会規範をよく守る、授業態度がよくクラスのため役の行動をとる、そして逆境に強いというような特徴があるといわれている (古荘, 2009)。

以下では自尊感情研究の現状について概観し、自尊感情の発達とその育成について考えてみたい。

### 3. 自尊感情の発達

先述のとおり自尊感情は、自己概念やその他類似の概念との関係があいまいに使われてきたことにより、近接概念で行われている研究も含めて発達の側面を考察することとする。

友利ら (2004) は自尊感情の発達について、以下のように説明している。まず、乳幼児期は親からの無条件の愛情や受容を基礎とすることから、条件付きの愛情や受容および能力を基本とした自尊感情に変化していく時期である。そして「両親からの愛情」、「身体的な能力」、「『良い』行為」の3つがその要因となるのであ

り、大人から「褒められる」といった肯定的なフィードバックを得ることが重要である。ただし幼児期の自尊感情はとても高くかつ非現実的であり、また容易に変化するものである。

小学生・児童期になると自尊感情は現実と結びつき、とりわけ知的能力（コンピテンス）を基礎とする。さらに同じクラスの友達など他の子どもたちとの相対的な評価が大きく影響するのである。そして対人関係、学問、身体、性格などの各側面における感情へと分化する。小学校3年から4年生のころは自尊感情に一つの節目があるとされる。古荘（2009）も4年生ごろから自尊感情は顕著に下がるが、それはこの頃のショックな出来事がうつ病のきっかけになることが多いこと、幼少時からのトラウマがある場合にはこの頃までに介入することが重要とするそれまでの精神科臨床の領域における指摘と一致するとしている。

中学生・思春期になると、より一層自尊感情は低下するが、男子より女子の方が早く大きく低下する。学業成績、身体的能力に加えて社会的な感受性が第二次性徴とあいまってより一層敏感になるのであり、それまでの両親との関係から仲間との関係により自尊感情が大きく影響されるようになるのである。

#### 4. 日本の小・中・高校生の自尊感情

実証研究において、まず東京都（2009）では小学校1年生から高校3年生まで学年が上がるにつれて自尊感情が低下すること、ただし中学3年生のみいったん上がるが高校生でまた低下するという結果が示されている。古荘（2009）も同様で、小学校2年生から中学校3年生まで学年が上がるごとに自尊感情が低下しており、とりわけ小学校4年生から大きな低下がみられるが高校1年生では若干の上昇がみられること、また男女では女子が低いことを示している。さらにQOL（クオリティ・オブ・ライフ：生活の質）尺度として身体的健康、家族、友達、学

校の満足度についても調査しているが自尊感情と同様の傾向を示しているのは「学校」への満足感の領域であった。

加えてドイツ、オランダとの国際比較の結果、日本人児童・生徒は大幅に自尊感情が低いこと、ただしオランダ日本人学校の小・中学生は日本の学生より高い得点にあることを示しており、家庭だけでなく学校・社会的要因の影響を考慮する必要があるといえる。

こうした日本の子どもたちの自尊感情の低さは1970、80年代頃より指摘されており、それは本心を抑圧する日本人の特性と関係するのではないかという議論がある。自分のことを「価値がある」と表出することを他人の反応を気にして抑制しているというのである。これについて東京都（2009）では、他者との関係で自己を客観的にとらえ自己概念を形成していく思春期以降に、日本の子どもの自尊感情が低下することと符合すると指摘している。一方古荘（2009）は一時期、本心では日本人の自尊感情は他国と差がないとした論調があったことに対し、本心を抑圧する特性そのものを自尊感情の低さにつながる葛藤としてとらえるべきであるし、なにより子どもたちの自尊感情得点の絶対値の低さが教育現場の感覚と一致していることを問題視している。

また、高橋（2009）は子どもの自己肯定感として小学4年生、6年生、中学2年生を対象に調査をしている。この結果やはり学年が上がるにつれて自己肯定感を持ってなくなっていること、さらに中学2年生で性差が現れ女子の方が低いことが示されている。とくに「だめな人間だと思ふことがある（逆転項目）」に「はい」と回答した割合が小学4年生では女子31.6%、男子30.6%とほぼ同じだが、中学2年生では女子55.9%、男子45.1%に上り差も開いている（図1）。一方「将来の夢や目標がある」の項目は「はい」と回答する割合が中学2年生で女子が66.3%に対し男子は58.2%となっており、男子の方が肯定的な回答が少ない項目も一部あ

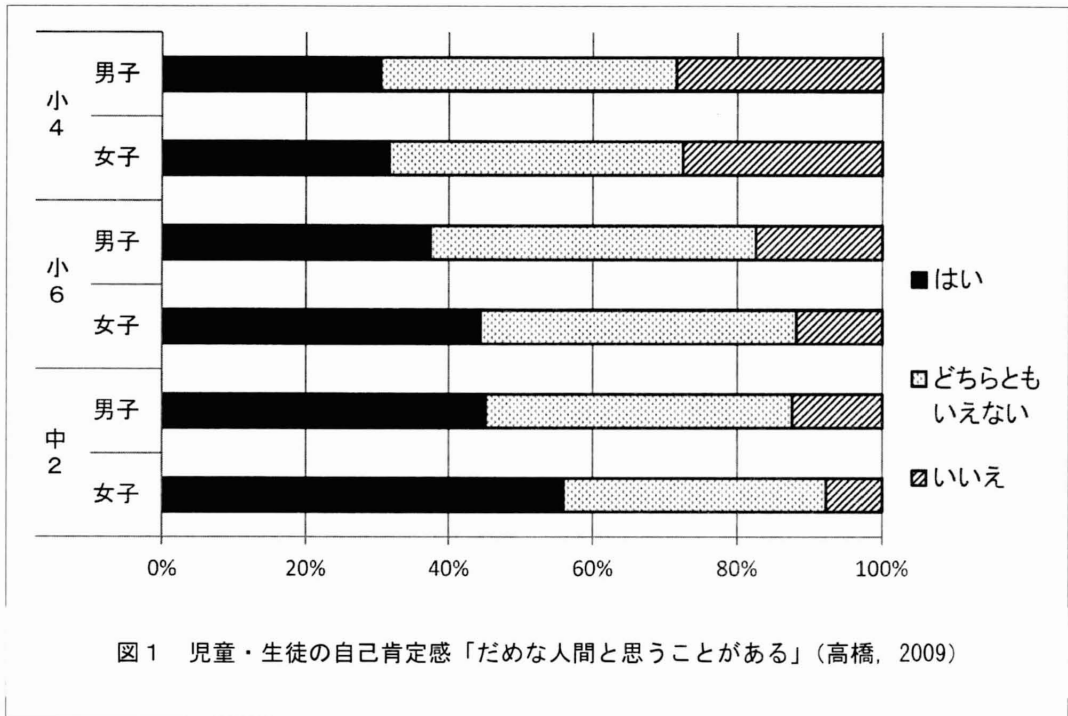


図1 児童・生徒の自己肯定感「だめな人間とすることがある」(高橋, 2009)

る。よって単に女子のみを注目するのではなく、男女それぞれの特徴を考慮する必要があるといえる。

以上のように、自尊感情および関連する実証研究においてはやはり子どもたちの自尊感情の低さおよび年齢とともに低下すること、さらに女子により低いという点は一貫した傾向といえそうである。以下ではこの実態を踏まえて現在教育現場で行われている取組についてみていきたい。

## 5. 自尊感情を「育む」学校教育での取組み

学校における自尊感情を「育む」取組みに向けて東京都(2009)は、子どもの発達段階に応じた「自尊感情を高めるための観点」として以下の5点を挙げている。

### ①自分への気づき

自分ができたことやがんばったこと、得意なこと、よさ等に気づくとともに、自分の行動や考え方を受け止め、自信をもつ

### ②自分の役割

集団や様々な人間関係における自分の役割に気づくとともに、周りの人のために役にたっていることを理解する。

### ③自分の個性と多様な価値観

自分の考え方や行動そのものの良さを理解するとともに、周りの人の多様な考え方を知り、受け止める。

### ④他者とのかかわりと感謝

多様な集団の中で活動し、人とのかかわりを広げるとともに、周りの人の支えがあって自分の活動が充実していることを理解し、感謝の気持ちをもつ。

### ⑤自分の可能性

自分の行動の達成感を感じるとともに、失敗や困難は自分ひとりだけではないという安心感を持ち、努力すればできるという自分への可能性をもつ。

以上は、教科・領域等や集団・個人に対する指導・援助の区別にかかわらず、あらゆる場面で留意することが重要として示されたものであ

る。  
次に学校における教科ごとの取り組みを見ると、自尊感情が強調されたのはまず人権教育や道徳の領域においてである。人権教育において自尊感情は、人権問題を解決するために行動できる人材を育成する要素として重視されており、それは自他の理解とその尊重が基礎となるためである。子どもの自尊感情を育むうえで学校教育は、彼らがもっとも多くの時間を過ごしそこで他者との関わりから自分が評価され、さらに様々な活動をとおして多様な感情を持つ自分に気づく場という意味で重要な役割を持つのである(大西, 2005)。

一方道徳活動において佐久間(2011)は、自分と向き合う時間としての道徳授業が自尊感情形成に大きな役割をもつと主張し、とくに学習指導要領に示された内容項目のうち以下との関連が深いと指摘し各テーマに沿った道徳授業プログラムを示している。

- ①生命尊重…生まれてきてよかったという感情をはじめ自他の生命の尊さを理解する。
- ②個性の伸長…特に自己理解が深まる中学生の時期に、自己の欠点のみでなく良さも理解し、自己を肯定的にとらえ(自己受容)、目標や希望をもつことの大切さを知る。
- ③人間の良さ・生きる喜び…自己満足ではなく、人から認められる喜びなどをとおして同じ人間としてともに生きていくことへの喜びを感じる。
- ④よりよい社会の実現・集団生活の向上…学校の集団生活のなかで役割と責任を担い、そのなかでともに支えあって生きる気持ちをもつ。  
さらに安東(2007)は、各教科において自尊感情を育む視点を生かす授業の例を紹介している。
- ①国語では、グループ学習において物語の題材を複数化しそれぞれ別の題材を読む。こうした工夫により他者との比較を少なくしたうえで生徒を交流させ、それぞれが成長を実感できるよう配慮している。

- ②社会科では、a. 困難な課題に個人または共同で取り組むことにより充実感や達成感を味わう。b. 教師や他の生徒からの肯定的な評価を通じて互いを認め合う。c. 学習前後の振り返りにより自己の成長を実感する。こうした過程を学習活動のなかで取り入れている。
- ③数学や理科では、なぜそうなるのか、素朴な疑問や驚き、知的好奇心を大切に、そこから困難な課題に挑戦する経験をする。そして分かったという達成感を味わい、自己の成長への実感につなげることを主眼としている。
- ④音楽や美術では、自分の表現したいことを相手に伝え、そのことにより自信を得ることなどを目指している。

ただし、教科の学習では教科の本質的な指導目標を達成することが第一義で、自尊感情はその結果として高まるものと位置づけられている。また教師に求められる姿勢としては「～をなさい」、「～はだめです」といった否定的強制的指導ではなく「～は良い表現ですね」など肯定的な指導を加えること、またグループ学習などを行う際には、互いを肯定的に評価できるようなメンバーの配置やグループの雰囲気づくりなどの配慮が求められている。

## 6. ジェンダーの視点からみた自尊感情の育成

これまで学校教育における自尊感情の育成について概観してきた。しかし実証研究では多く指摘されている自尊感情の男女差について、これをふまえた育成方法に触れたものはあまり見当たらない。しかし例えば八木(1991)は女性が女性性を獲得することが自尊心の基盤となると指摘しており、これには批判もあるが(園田, 2000)、自尊感情とジェンダーの関連の強さを示唆するものである。

また先述のとおり道徳教育において自尊感情育成に果たす役割は大きい、これまで道徳性の発達についてジェンダーの視点で多くの議論がなされてきた。道徳性の発達段階を提唱した

のは Kohlberg, Levine, & Hewer (1983 片瀬・高橋訳 1992) だが、彼は「公正と正義」によって善悪を判断するとした道徳性の発達において女性は男性よりも劣ったものとみなしていた。それに対し Gilligan (1986 岩男監訳 1982) は、女性の道徳性は自己と他者に対する「配慮と責任」によって判断するという男性とは別の発達をたどる、すなわち男性は独立志向、女性は関係志向となると主張したのである。その後の研究では道徳性の判断に男女差はない、あるいは Gilligan が女性特有の価値があることを主張することにより逆に男女の特性を固定化させてしまうという指摘や批判もある。しかし道徳性をジェンダー視点でとらえることの重要性を主張した点は意義があるものといえる。

これと同様自尊感情は自分自身の評価と他者からの評価双方からの影響を受けるとされているが、ステレオタイプとしての女性はより他者からの評価に影響を受けることが考えられる。

前出の高橋 (2009) の調査では、性別期待について、「男(女)だから～しなさい」と言われる程度は、中学2年生で女子が65.5%、男子が49.4% (「いつも言われる」、「時々言われる」と回答した割合の合計) と女子に多いこと、また男女ともにそれを頻繁に言われることは自己肯定感に負の関連していること、しかし適度な頻度で言われることは男子のみ自己肯定感に正の関連をしていることを示している。

さらに、学校において「友達に自分の気持ちをはっきり言える」という項目に「あてはまる」と回答した割合は男女差の大きい中学2年生で女子47.7%に対し男子は35.5%と少ない。一方「友達が自分のことをどう思っているか気になる」と回答した割合は中学2年生で女子66.0%に対し男子は44.9%である。

こうした結果から、女子については、性別期待が自尊感情に負の影響を与えていること、性別期待に沿って関係性を重視することは他者とのコミュニケーションや良い関係づくりに役立つ一方で、他人の反応や評価が気になり抑圧さ

れている可能性が考えられる。また男子については、適度な性別期待が自尊感情に正に影響するが、それが自己表現を抑圧し他者との関係づくりに負に影響することが推測される。よってジェンダーの視点で教育を考えると、一般に女子への配慮に傾きがちであるが、両性にとっての配慮が必要といえる。

ジェンダーの視点で教育をとらえるその論点は種々あるが、例えば Askew & Ross (1988 堀内訳 1997) は、男女は社会化の過程が異なり、性差別解消に向けたプログラムも大きく異なると指摘している。すなわち女子に対しては社会における女子への差別のパターンを明確にし、それをなくす方法を考えることが有効であるが、一方男子に対しては、ステレオタイプのな差別を理解した上で男子が受けているプレッシャーについて考え、男らしさの「規範」を変えることに支援的な雰囲気をつくるのが有効としている。そして現在のイギリスでは男子の方により支援が必要であり、とりわけ男子校の中にある性役割強化のメカニズム(学校自体が攻撃的・競争的な行動を奨励し、社会的相互関係を築くことを抑制する)からの解放が必要だとしそのためのプログラムを開発し実践している。

また土田 (2008) は同じ男子校でも進学校と進路多様校の普通科、専門科コースの3コースで自尊感情の比較を行っている。その結果進学校の男子は幸福感も高く、親の期待を感じ勉強にも自信を持っている。また普通科コースの男子はスポーツや友人関係に自信を持っている。一方専門科コースの男子は幸福感が低く、「私はとても幸せだ」と回答する割合は進学校の生徒の82.8%に比べ62.0%にとどまっている。また友人関係や親からの期待も他の2コースに比べて否定的であり、孤独で自信のない自己表現の苦手な男子の姿が表れている。そんな彼らに対し教員側は、彼らをおるべき男子らしさから解放させようとする一方で、成績も中位以下の彼らには将来の選択肢は女子よりも少なく、

自ら進路を決定する力も弱いため、自立したあべき男子らしさへ支援しようとする矛盾した支援が存在しているというのである。

しかし彼らは、女子から隔離し強い男子からも分離して初めて自分の居場所ができるという層であり、彼らにとってこそ重要な男子校の新たな存在意義といえる。土田（2008）はこうした状況から、これまでジェンダーの視点でもあまり注目されてこなかった男子の多様性に注目すべきであるとしている。

一方今田（2008）は、女子について、その進路選択は男子と異なり「エリートか否か」という軸だけでなく「良妻賢母か否か」という2つの軸によってとらえるため複雑であるとしている。そして進学校であり、かつ良妻賢母ではなくエリート志向する者が多い高校の生徒の自尊感情が比較的高い。またそれほど進学校ではなく、かつ良妻賢母型志向する者が多い高校の女子生徒の自尊感情は低い。一方で進学校ではないが「エリート」かつ「良妻賢母」両方を志向するタイプが多い女子校の生徒の自尊感情が最も高いことを示している。このタイプは語学といういわゆる女性的な特性を伸ばすことに力を入れ、それによって家庭でも仕事でも成功しようとするいわば「女性性利用型成功志向」といべきタイプなのだという。これは女子校が生き残りをかけて打ち出した新たなタイプであるが、ただし卒業後の進路で本当にそれが実現できるのかは未知数である。しかし、分化した女子の生き方に一つの方向性を打ち出したという点では注目すべきといえる。

このように、男子校女子校ともにジェンダーを踏まえて教育および進路選択の方針に新たな方向性を示していることが明らかになった。生徒のジェンダー化における男子校・女子校の役割を論じるのは本論の趣旨ではなく別の機会に譲るが、ここで注目したいのは、自尊感情の育成を考えたとき、ジェンダーの視点からみた学校の教育および進路指導の方針が生徒たちの自尊感情に大きく関わっているという点である。

またそれは学校がジェンダー化された社会の現状をどのようにとらえ、生徒たちにどのような力をつけて送り出すか、すなわち社会への橋渡しの役割をどのように認識するかということと深く関連するであろう。同時に学校教育におけるジェンダーの前提そのものがこれまでの伝統的／非伝統的ではとらえきれない、多様かつ新たな生き方を提示する必要性に迫られており、それがとりわけ一部の男子校・女子校の取り組みにすでに表れてきているともいえる。こうした点において今後、自尊感情の育成を進路指導およびキャリア教育のなかで取り上げることもより重要になるといえよう。

以上、本論では自己概念とくに自尊感情の発達について整理し、児童・生徒の現状と学校での育成について概観した。その上で児童・生徒の自尊感情育成に向け、ジェンダー視点を含めた育成、指導方法を検討することの有用性を論じた。本論では未だプログラムなど具体的な方策の提案には至らなかったが、それに向けまず自尊感情育成につながるジェンダー視点での理論的検討をより精緻なものとしていくことが今後の課題である。

## 文献

- 安東茂樹（2007）「セルフ・エスティーム」をはぐくむ授業づくり 明治図書
- Askew, S. & Ross, C. (1988) Boys don't cry: Boys and sexism in education. Open University Press.
- （アスキュー, S.・ロス, C. (1997) 堀内かおる（訳）男の子は泣かない—学校でつくられる男らしさとジェンダー差別解消プログラム—金子書房）
- 中央教育審議会（2006）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyoyo/chukyo0/toushin/06021401/all.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyoyo/chukyo0/toushin/06021401/all.pdf)
- 古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はな

- ぜ低いのか 光文社
- Gilligan, C. 1982 *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Harvard University Press.
- (ギリガン, C. (1986) 岩男寿美子 (監訳) もうひとつの声: 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店)
- 今田絵里香 (2008) 女子高校における女性性利用型成功志向 木村涼子・古久保さくら (編) ジェンダーで考える教育の現在 解放出版社 p.78-95.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980) 青年期における自己概念の特質と発達傾向 心理学研究, 51-5, 279-282.
- Kohlberg, L., Levine, C., & Hewer, A. 1983 *Moral Stages: A current formulation and response to critics*. Basel: Karger.
- (コールバーグ, L.・レバイン, C.・ヒューアー, A. (1992) 片瀬一男・高橋征二 (訳) 道德性の発達段階 新曜社)
- 近藤卓 (2010) 自尊感情と共有体験の心理学 金子書房
- 松田君彦・松山知二 (1988) 児童期における自己概念の発達の研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 357-369.
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説 道德編 日本文教出版.
- 諸富祥彦 (2011) ほんものの「自己肯定感」を育てる道德授業 明治図書.
- 大西雅人 (2005) 子どもの自尊感情をはぐくむ学校についての一考察 高知教育センター紀要, 42-2.
- Rosenberg, M (1965) *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton University Press.
- 佐久間奈々子 (2011) 自尊感情をはぐくむ道德授業と資料集 中学校編 明治図書
- 園田直子 (2000) 学業達成とジェンダー 伊藤裕子 (編) ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房 p. 54-76.
- 高橋道子 (2009) 子どもの自己像の形成とジェンダー 直井道子・村松泰子 (編) 学校教育の中のジェンダー 日本評論社 p.19-35.
- 東京都 (2009) 自尊感情や自己肯定感に関する研究 東京都教職員研修センター紀要, 8, 3-26.
- 友利久子・嘉数朝子・大城一子・仲程えり子・金武朝成・仲村美鈴 (2004) 子どもの自尊感情の発達と親子のコミュニケーションスタイル 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 6, 111-133.
- 土田陽子 (2008) 男の子の多様性を考える 木村涼子・古久保さくら (編) ジェンダーで考える教育の現在 解放出版社 p. 62-77.
- 八木保樹 (1992) 男性性と女性性: 女性の自尊心の基盤に関する実験的研究 実験社会心理学研究, 32-2, 145-159.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.